

仙台藩茶道茶道頭二世清水動閑著 『動閑茶湯書』の解説と校注(その一) 『露地之書』の解説研究



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世
仙台藩志会理事

「政宗公ワールド」プロジェクト理事
東北大学名誉教授・東北福祉大学特任教授

大 泉 道 鑑(康)

大和国小泉の城主片桐石見守貞昌(石州)(慶長十年～延宝元年―一六〇五～一六七三)は、四代將軍徳川家綱(慶長十年～延宝元年―一六〇五～一六七三)の茶道師範を命ぜられ、將軍家の茶道の規格を定めたが、これが世に言う『石州流三百箇條』である(『よくわかる茶道の歴史』)。一方、仙台藩では、藩祖伊達政宗公(永禄十年～寛永十三年―一五六七～一六三六)によって京都から招聘された茶道頭一世清水道閑(天正七年～慶安元年―一五七九～一六四八)の没後、清水道閑(後に道漢、さらに動閑と改められた。)(慶長十九年～元禄四年―一六一四～一六九一)、が二世を継いだ。將軍家の茶道の動きに対応するかのようには、仙台

藩では二世動閑が、二代藩主伊達忠宗公(慶長四年～万治元年―一五九九～一六五八)の命により、石州の許で十三年間の永きにわたり修行を積んだ後に、茶道頭に任ぜられた。『石州流系図写并聞書ノ写』、『数寄道心法』、『茶道辞典』。

さて、『清水動閑註解石州流三百箇條』三巻は、石州の高弟の二世動閑が『石州流三百箇條』に註解を加えたものである(『茶道辞典』、『片桐石州の茶』、『石州流三百箇條付仙台藩茶道』)。なお、このような註解書としては、この他に石州流怡溪派の開祖怡溪宗悦(正保元年～正徳四年―一六四四～一七一四)及び石州流鎮信派の開祖松浦鎮信(元禄八年～元禄十六年―一六二二～一七〇三)によるものがよく知られている(『茶道辞典』)。

この二世動閑の註解書(三巻)は、『動閑茶湯書』(十八冊)と共に仙台藩茶道石州流清水派(当流)では最も重要な文献とされ、二世動閑以後茶道頭及び宗家を継承する際にその印(三種の神器)のひとつとしてその都度手渡されてきたものである(三十頁の「解題」の図1参照)。なお、この「三種の神器」の残りの二つは、次頁に示した『片桐石見守貞昌宗閑居士像』(図1)及び『渋紙庵之記』(図2)

の二幅の掛軸である。



図1 『片桐石見守貞昌宗閑居士像』
妙閑子(老中松平周防守康福)自画賛

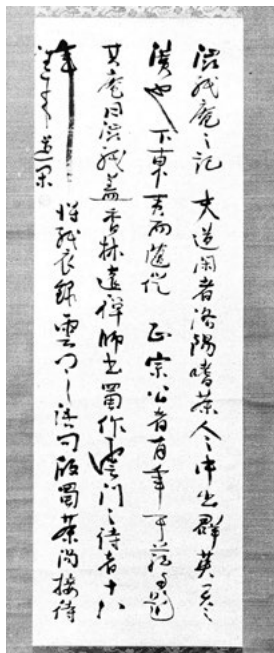


図2 『洪紙庵之記』
二世清水動閑筆

これらの中で特に、『動閑茶湯書』は、筆者の祖母九世落合道鑑(明治十六年〜昭和四十六年—一八八三〜一九七二)の代まで歴代の宗匠のみが目を通していた秘伝書として取り扱われてきた。前に述べた註解書に加え十八冊の『動閑茶湯書』のうち、『客呼様之書』、『客挨拶之書』、『客呼様客振之書』、『床之内之書』、『風炉茶湯之書』、『三斎公御咄之書』及び『道具押形』の七冊は、筆者の母十世大泉道鑑

(明治四十二年〜平成二十二年—一九〇九〜二〇一〇)により、解読研究が既に行なわれ、『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』で初めて明らかにされた。今回、筆者は十世道鑑の未発表の『露地之書』の解読原稿を基にして、その不明な箇所の解読をさらに進め、また理解の便を考慮して傍註を付して学術誌『茶の湯文化学』に投稿した結果、最近その三十三号に採択された。

この文献には露地の作製における作業心得が詳細に記されているため、文化財庭園に携わっている研究者は言うまでもなく、石州流だけではなく、広く他の流派の茶道関係者にとっても、重要な内容を含んでいると考えられる。しかし、今回は紙面の都合により、投稿の際に用いた「要旨」に加え、『茶の湯文化学』に掲載された内容の中で「凡例」、「本文」及び「註解」の箇所は割愛し、「解題」、「謝辞」及び「参考文献」を以下に紹介するに止めた。なお、この解読研究の内容等の詳細は、前に述べた学術誌の三十三号五十〜六十一頁に掲載されているので、それを参照して戴きたい。また、筆者は『動閑茶湯書』の中の『茅葺数寄屋寸法』の解読研究の成果を学会誌に投稿準備中であり、この内容を『閑』に近いうち紹介する予定である。

『動閑茶湯書』の解読と校注（その一）『露地之書』の要旨

解読 仙台藩茶道石州流清水派宗家

（故）十世 大泉道鑑

十一世 大泉道鑑

校閲 元仙台市博物館長 東海林恒英

わび茶を大成した利休は、茶庭を露地と呼び、仏心を露出する仏界と説いた。片桐石州は、このわび茶を色濃く醸し出した石州流を大名茶として確立させた。仙台藩茶道石州流清水派（当流）の茶道頭二世清水動閑は、石州のもので十三年間修行して、『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）及び『動閑茶湯書』（十八冊）を著わした。この十八冊の著書の中に、『露地之書』が含まれている。

この『露地之書』の内容は、その冒頭の「佐藤將監屋敷」及び「豊前之一老伊織路地」の図が記され、これらに続く第一条には、茅門の柴垣に梅の木を植え添えた際に、その心を表現した「和歌」が詠まれている。第二条以下には、露地の作庭では最も重視される役石などの石組、砂利や砂の使い方、庭木の植え方、松葉の敷き方、塵穴の掘る場所

とその作り方、箒を掛けるための釘等全てで二十七条にわたり、その作業心得からある所には具体的な寸法までが記載されている。従って、この文献は当流の歴代の茶道頭・師匠が作庭に深く関わった文化財庭園・茶庭の特徴を歴史的に解明する研究だけではなく、他の流派の作庭に関する資料としても極めて重要な文献であり、今回が解読されて初めて一般に公表されるものである。



『茶の湯文化学』
33号の表紙

『動閑茶湯書』の解説と校注（その一）『露地之書』

解説 （故）十世 大泉道鑑

十一世 大泉道鑑

校閲 東海林恒英

【解題】

石州流は、大和国小泉の城主片桐石見守貞昌（石州）（慶長十年～延宝元年Ⅱ一六〇五～七三）を祖とする茶道の流儀であり、石州は『石州流三百箇條』により、將軍家の茶道の規格を定めた『よくわかる茶道の歴史』。一方、仙台藩では、二代藩主伊達忠宗（慶長四年～万治元年Ⅱ一五九九～一六五八）の命により、茶道頭二世清水道閑（後に道漢、さらに動閑と改められた）（慶長十九年～元禄四年Ⅱ一六一四～九一）が石州の許で十三年間の永きにわたる修行を積んだため、石州の高弟として茶道史にその名を残した（『石州流系図写并聞書ノ写』『数寄道心法』『茶道辞典』）。

さて、百箇條、二百箇條及び三百箇條の三巻から構成されている『清水動閑註解石州流三百箇條』（図1の下端）は、

二世動閑が『石州流三百箇條』に註解を加えて記したものであるとして、筆者まで受け継がれてきた（『茶道辞典』『片桐石州の茶』『石州流三百箇條付仙台藩茶道』）。この三百箇條の註解書（三巻）と関連の深い十八冊の茶湯書から構成された二世動閑筆『動閑茶湯書』（図1上段）は、仙台藩茶道石州流清水派（当流）では最も重要な文献として取り扱われてきた。その理由としては、二世動閑筆とされているこの二つの茶湯伝書は仙台藩四代藩主伊達綱村（万治二年～享保四年Ⅱ一六五九～一七一九）の命により、二世動閑の実子（清水快閑）ではなく、馬場道斎（後の三世清水道竿）（寛文二年～元文二年Ⅱ一六六二～一七三七）が代を継いだ印のひとつとして、引き継がれたものであることが挙げられる。これ以降は、当流の歴代の茶道頭が代を継ぐ際には、その都度この両茶湯伝書が後継者に渡されてきたため、「三種の神器」のような役割を果たして現在十一世の筆者が所持している。『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）の所々に「別書にあり」あるいは「口伝」と記されている箇所が見られ、『動閑茶湯書』（十八冊）にはそれと関連のある箇所に補足された内容が記されている。従って、前に述べた「別書にあり」と「口伝」はいずれも『動閑茶



図1 『清水動閑註解石州流三百箇條』（下段三巻 大きさ：横15.0cm、縦20cm）及び
『動閑茶湯書』（上段十八冊 大きさ：横15.5cm、縦20.8cm）

湯書』（十八冊）を指していると考えられ、この両者の間には密接な関連性があることを容易に窺うことができる。特にこの『動閑茶湯書』（十八冊）は、九世落合道鑑（明治十六年～昭和四十六年＝一八八三～一九七二）の代まで門外不出とされてきたが、十世大泉道鑑（明治四十二年～平成二十二年＝一九〇九～二〇一〇）は、この三百箇條の註解書に加え、『動閑茶湯書』の十八冊のうち、『客呼様之書』『客挨拶之書』『客呼様客振之書』『床之内之書』『風炉茶湯之書』『三斎公御咄之書』及び『道具押形』の七冊について、解説研究を行い、前に示した十世道鑑の著書の中すでに明らかにした（『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』）。一方、未発表の残りの十一冊は『腰掛茅葺門等口伝』『評判^カ之書』『置合之書』『聞集之書』『炭置様之書』『茶杓削り法花入切様』『法合之書』『露地之書』『五徳入様之書』『茅葺数奇屋』及び『盆立台天目立之書』の茶湯書である。今回、筆者は十世道鑑の未発表の『露地之書』（丁数十七枚）（図2及び3）の解説原稿を基にして、その不明な箇所^①の解説をさらに進め、また理解の便を考慮して傍註を付して上梓した。

ところで、宮城県内に散在している文化財庭園のなかで、

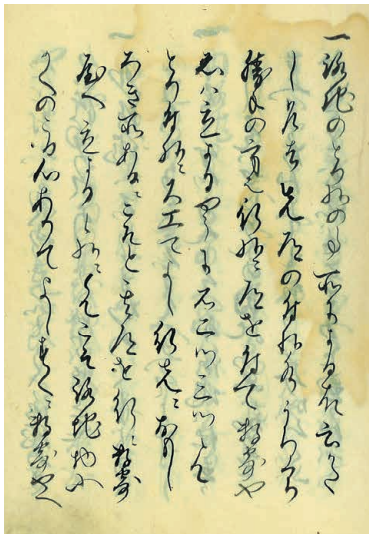


図3 『露地之書』の本文一頁（右）及び二頁（左）

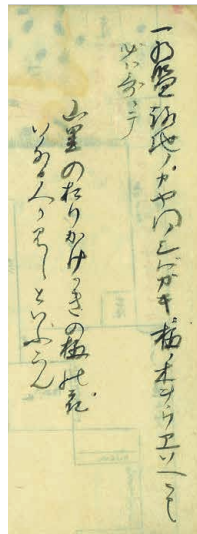


図2 『露地之書』 丁数：17枚
大きさ横：15.5cm、縦20.8cm

二世動閑の作庭と言われている煙雲館庭園（国の史跡・名勝 気仙沼市）、三世清水道竿（寛文二年～元文二年Ⅱ一六六二～一七三七）の作とされている有備館庭園（国の史跡・名勝 大崎市）、旧阿部家庭園（大崎市）、旧亘理氏庭園（登米市）等について、最近文化庁の委託事業によって歴史的な調査研究が実施された。その結果、これらの庭園のそれぞれの概略・特徴等が示されたが、当流とこれらの庭園との直接的な関連性を明らかにすることには至らなかった（『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』）。

さて、この『露地之書』の冒頭には、「佐藤將監屋敷」（図4）及び「豊前之一老伊織路地」（図5）の配置図が記されている。それに続く第一条には、将監路地の茅門の柴垣に梅の木を植え添えた際に、その大切な心を表現した「和歌」が詠まれており、また第二条の「露地の取り様の事」には、先道の付け方と路地の取り方に触れられている（図3）。これ以降では主として、路地の作庭では最も重視される役石などの庭石について詳述されている。

具体的には、「外路地の石」を据える際の心得、「下腹雪隠」に使う小砂、石、砂利の用い方、「石の見立の事」に

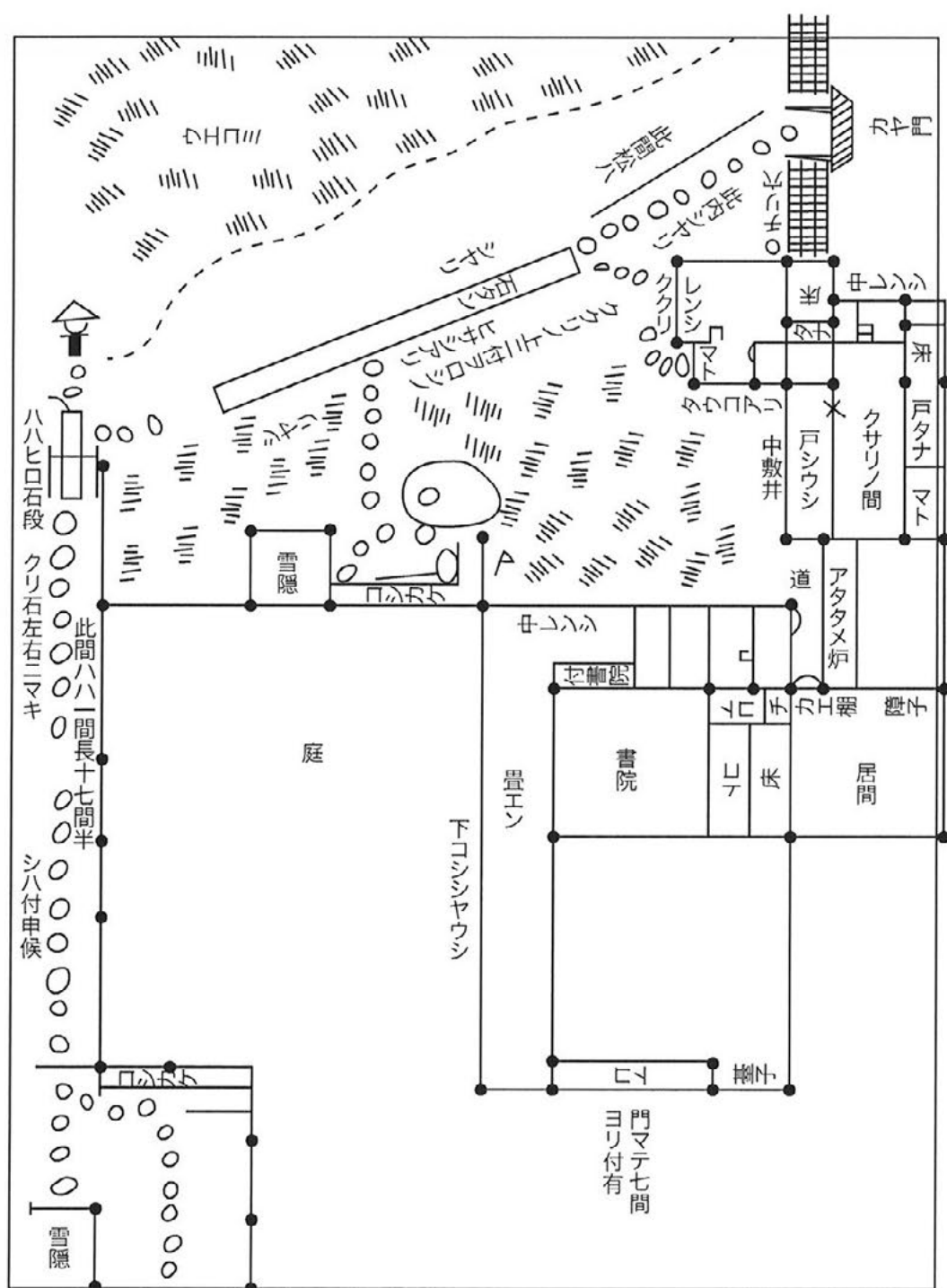


図4 佐藤將監屋敷

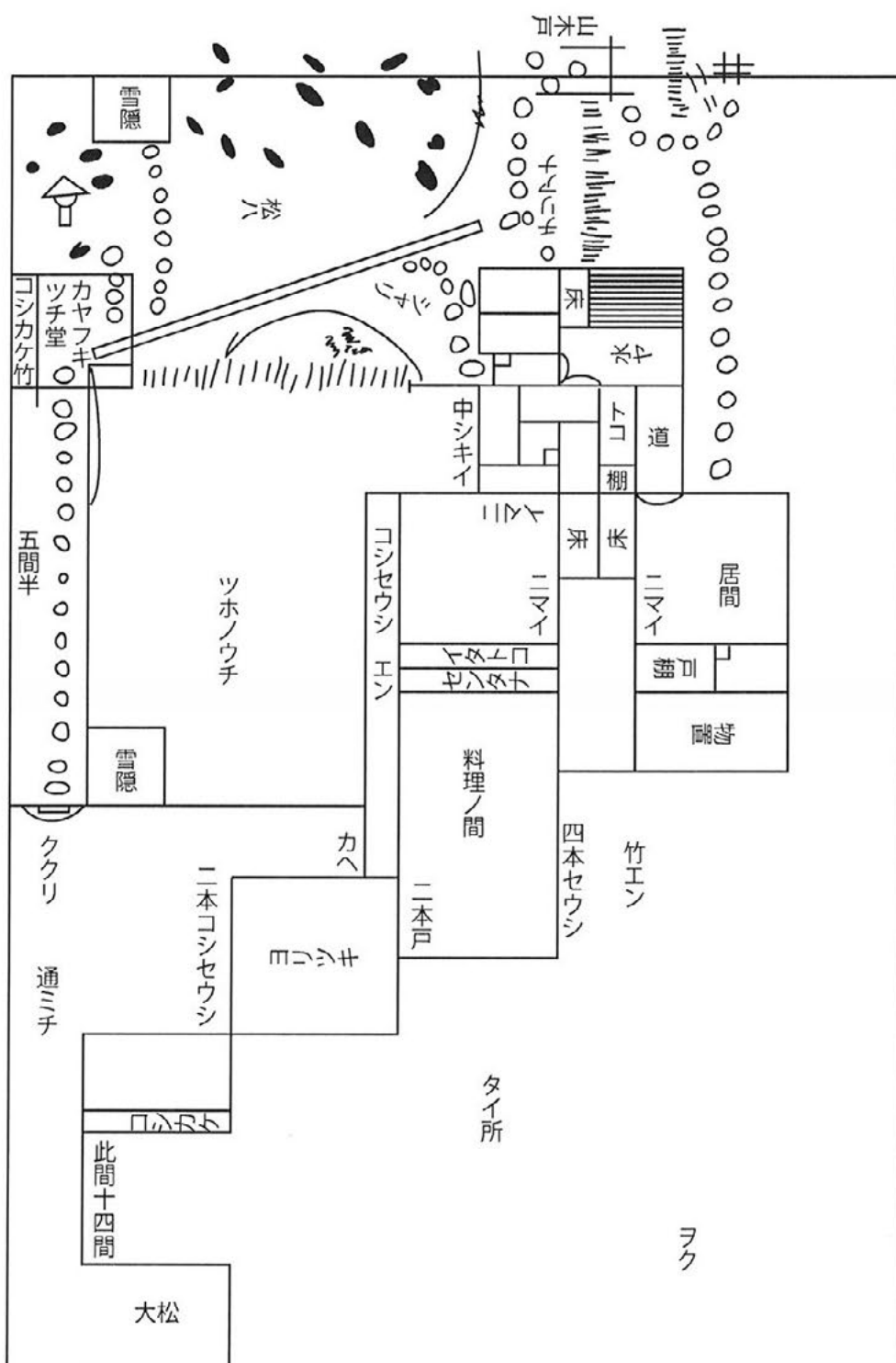


図5 豊前之一老伊織路地

は刀掛の石の選定法とその大きさ、「潜りの下の石」の選
び方の心構え、「中潜りの石」の大きさ、高さと広さ、「外
の出戸の石」の形と大きさ、「飛び石の事」には、多種多
様の並べ方、その大きさ、形、色による取り合せ方の心得、
更に「飛び石で真つ直ぐな石と歪んだもの」を置く方法等
の説明が行なわれている。「手水鉢」を据える適切な位置
とその設置する際の留意点、「長き鉢」の場合の据える位置、
「手水鉢の前石」及び「水門の石」の選び方、「水鉢の近く
の役石」の据え方のその形、「手水鉢」を磨く心得、「腰掛
の内の石」は、自然石で細長いのが良いこと、「雪隠の壺
の石」を据える際の心得とその形と大きさ、更に、「雪隠
の戸摺の石」は飛び石より大きく見映えがするのが相応し
いとされている。

以上述べた他に、「内路地の事」では、木の植え方の心得、
「石燈籠」の設置場所の選び方、「塵穴」を掘る適切な場所、
「箒掛の釘」を打つ所、「蒲鉾壇」と「石段」の作り方、そ
して松葉と砂利を路地に活用する際に必要な心遣が記され
ている「松葉の事」と「砂利の事」を含めると、併せて
二十七項目にもわたり、中にはそれぞれの作業心得だけで
なく具体的な寸法まで記載されている箇所もある。従って、

この文献は当流の歴代の茶道頭・師匠が作庭に深く関わつた文化財庭園・茶庭の特徴を歴史学的に解明する研究だけではなく、他の流派の作庭に関する資料としても極めて重要な文献であり、今回が解読されて初めて一般に公表されるものである。また、本解読研究によつて当流の作庭の基本的な考え方やその特徴の詳細が、初めて明らかにされるだけではなく、当流の宗匠達が作庭したと伝えられている文化財庭園の特徴や歴史的価値を解明する研究の進歩に、少なからず寄与するのではないかと期待している次第である。

【謝 辞】

本稿の御高閲と解説・解釈の困難な箇所について御指導を賜りました元仙台市博物館長東海林恒英先生に衷心から感謝の意を表します。また、本稿を上梓するに当り、終始有益なご助言を頂きました庄子昇博士、小塚雅子様、森聡子様及び志村佳苗様に厚くお礼申し上げます。

【参考文献】（五十音順）

『岩出山町史通史編・上巻』岩出山町史編纂委員会

平成二十一年

『片桐石州の茶』米原正義等 講談社 昭和六十二年

『関』（第二十七号）十一世大泉道鑑 全日本石州流茶道協会

平成二十九年

『原色茶道大辞典』井口海仙、末宗廣、永島福太郎（監修）

淡交社 昭和五十年

『茶道辞典』桑田忠親 東京堂 昭和四十三年

『清水動閑註解石州流三百箇條』（三巻）二世清水動閑

十一世大泉道鑑蔵

『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』

十世大泉淑子（道鑑） 丸善出版センター 昭和五十五年

『数奇道心法』東京国立博物館蔵

『石州流系図写并聞書ノ写』鈴木政道

東京国立国会図書館蔵

「第十二回文化財庭園フォーラム シンポジウム資料

石州流清水派の作庭と伝わる庭園に関する調査研究報告」

白崎恵介 平成二十七年

『茶室露地大事典』中村昌生（監修）淡交社 平成三十年

『動閑茶湯書』二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵

『名勝地保護関係資料集』平澤毅（独立行政法人国立文化

財機構奈良文化財研究所）平成二十七年

『宮城県の名勝に関する特定の調査研究事業報告書』

文化庁・宮城県教育委員会 平成二十八年

『よくわかる茶道の歴史』谷端昭夫（株）淡交社

平成十九年